2012年6月9日（土）

# 第2回　夙川オアシスロード
## ～作家たちが愛した“文学の道”

講師：土居　豊

## ●テーマ

市民の憩いの場・夙川オアシスロードは、作家たちの愛した道でもあります。村上春樹、井上靖、遠藤周作など、夙川ゆかりの作家たちを論じます。

## ●概要

少年期に洗礼を受けた遠藤周作ゆかりの夙川カトリック教会から、夙川沿いに下って、河口近くで少年期を過ごした村上春樹に至る「文学の道」をイメージする試み。

『猟銃』『闘牛』などで夙川近辺の風景を描いた井上靖にも触れ、夙川沿いを舞台とする近現代小説の流れをたどる。

また、参考として、現代の若者に絶大な人気を誇るライトノベル『涼宮ハルヒ』で、夙川オアシスロードが描かれていることにも言及する。

## ●ノーベル文学賞候補を４人も生んだ夙川「文学の道」

偶然かもしれないが、夙川にゆかりの深い日本人作家の中に、ノーベル文学賞候補が４人もいるというのは、特異なことである。また、同じく夙川ゆかりのライトノベル作家・谷川流の『涼宮ハルヒの憂鬱』シリーズは、アニメ化も含めて、世界中のサブカルファンに愛され、「聖地巡礼」という社会現象を生んだ。

夙川の畔には、なにかしら、作家の創作意欲を沸き起こさせるパワースポットがあるのかもしれない。あるいは、村上春樹風にいうと、世界に通じる普遍的な「井戸」が、夙川オアシスロードには隠されているのかもしれない。

## ●夙川オアシスロードゆかりの作家・作品たち

### 1）村上春樹『ランゲルハンス島の午後』

※ 引用

「僕の家と学校のあいだには、川が一本流れている。それほど深くない、水の綺麗な川で、そこに趣のある古い石の橋がかかっている。バイクも通れないような狭い橋である。まわりは公園になっていて、キョウチクトウが目かくしのように並んで茂っている。橋のまん中に立ち、手すりにもたれて南の方に目をこらすと、海がきらきらと光を反射させているのが見える。」　（村上春樹　安西水丸『ランゲルハンス島の午後』新潮文庫）

村上春樹は京都市生まれで、生後すぐに西宮市に転居し、少年期までは西宮市民だった。その作品の随所に、西宮での子ども時代の印象が描写として顔を出している。例えば、『海辺のカフカ』のお椀山は、甲山をモチーフにしていると考えられているし、『ねじまき鳥クロニクル』で描かれた「暗渠に流されていく」イメージは、幼い春樹少年の実体験が基になっているとみられる。風景としても、『1973年のピンボール』に登場する灯台（今津灯台？）、『ねじまき鳥クロニクル』で回想場面に出てくる球場（甲子園？）などが描き込まれている。最新作『１Q８４』にも、西宮ヨットハーバーの名前が出てくるあたり、村上文学の根っこには、幼少期を過ごした土地としての西宮が色濃く反映しているといえよう。

### 2）井上靖『猟銃 闘牛』

『猟銃』あらすじ：詩人の元に偶然の思い違いから届けられた３通の手紙。１人の男をめぐる３人の女の心の闇が明らかにされていく。我執、嫉妬、宿命、業、それらに振り回される人間の生き様が描かれた作品。

※ 引用

お友達と一緒に学校へ行く途中、阪急電車の夙川まで来て、私は課外の英語読本を家に忘

れて来た事を思い出したのです。そしてお友達に駅で待っていて戴いて、自分一人家に取りに帰ったのですが、家の御門の前まで来て、私は何故か門の中へ這入る事が出来なかったのです。
（井上靖『猟銃 闘牛』新潮文庫）

（年譜より）
1936年（昭和11年）、京都帝大卒業。『サンデー毎日』の懸賞小説で入選し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社。学芸部に配属される。日中戦争のため召集を受け出征するが、翌年には病気のため除隊され、学芸部へ復帰する。
※ 戦時中の一時期、西宮市川添町に住んでいた。
なお部下に山崎豊子がいた。戦後は学芸部副部長をつとめ、囲碁の本因坊戦や将棋の名人戦の運営にもかかわる。
1950年（昭和25年）、『闘牛』で第22回芥川賞を受賞。
1951年（昭和26年）、毎日新聞社を退社。以後創作の執筆と取材講演のための旅行が続く。

※ ノーベル文学賞候補について
歴史作品を中心に各国語に翻訳され、ペンクラブ会長時代にはしばしばノーベル文学賞の候補とされた。巧みな構成と詩情豊かな作風は今日でも広く愛され、映画・ドラマ・舞台化の動きも絶えない。

## 3）遠藤周作『白い人 黄色い人』

『黄色い人』あらすじ：仁川のカトリック教会近辺を舞台に、日本人と西洋人の罪意識の違いを焦点に据え、戦時下の人の心の荒廃を描いた作品。

※ 引用
阪急の駅に二年ぶりでおりた時、ぼくはこれら仁川の風景のなかに、子供のころの自分をむなしく探そうとしました。赤松林や白い花崗岩の丘に結びついた幼年時代ではありません。日本の土地にありながら、にせの異国風景をいかにも小賢しく作り上げた仁川は、黄色人のくせに母や叔母の手によって、あなたの教会の洗礼を受けさせられた自分にそっくりでした。
（『白い人 黄色い人』新潮文庫）

※夙川と仁川、二つのカトリック教会
少年期に遠藤周作は、夙川カトリック教会で洗礼を受けている。その体験を、『黄色い人』では仁川の教会に舞台を変えて描いている。
遠藤周作が少年期の多感な時期を過ごした夙川近辺のことは、エッセイの中で何度も語られている。特に、夙川カトリック教会で洗礼を受けたことは、後々まで尾を引き、信仰の問題として遠藤の生涯のテーマとなっていく。

（年譜より）
1933年（昭和 8年）父母の離婚により母に連れられて兄とともに日本に帰国し神戸市の六甲小学校に転校する。
1935年（昭和10年）私立灘中学校に入学。
4月 母は宝塚市の小林聖心女子学院の音楽教師になり5月29日受洗。
6月 周作も兄とともに西宮市の夙川カトリック教会で受洗。洗礼名ポール。
1940年（昭和15年）灘中学校卒業。

※ノーベル文学賞候補について
『沈黙』をはじめとする多くの作品は、欧米で翻訳され高い評価を受けた。グレアム・グリーンの熱烈な支持が知られ、ノーベル文学賞候補と目されたが、『沈黙』のテーマ・結論が選考委員の一部に嫌われ、『スキャンダル』がポルノ扱いされたことがダメ押しとなり、受賞を逃したと言われる。